

初めての百文字小説

おもみつぎ

「一六八日」

父の朝は早かった。ちようど私のソシヤゲのログボ更新と同じ時間だ。そのためスマホには父の指紋も登録されている。だけど機械に弱く変なことはしない。今日も父は何も知らずに私の連続ログイン日数を更新している。

「シンメトリーの人」

文藝部ではハンドルネームで呼び合う風習がある。名付けに個人様々な過程がある。好きな漢字の詰め合わせや本名を振るもの、キャラの名前等。私はその過程で人を覚える。できた名前より過程の方が個性が強いのだ。

「身長一一一センチメートル」

私は荒ぶる獣だった。それを理性と社会性で抑える。白く光沢のある曲面を指でなぞっていく。ひんやりとした感触が脳に入り、感情が沸騰する。頬ずりしたくなるのを荒い呼吸とともに抑える。いやあペッパー君かわい。

「攻撃表示」

模様の札が彼女の手で踊る。様々なシャツフルが続く。つい見入っていると彼女は数枚引き、並べ、一枚表にし出す。「騎士の正位置、意味は君の竜の破壊」なぜタロット風に決闘するのだろうか、この人は。

「こには理解できないもの」

ドラゴンも助平である。それは人類共通の認識だ。無論私も、私の友人達もそうだ。ドラゴンを接種すれば皆悟りを開き高次へ到れる。しかし今は悟りを捨てる。ドラゴン全てがセンチタイプ判定になったこと。許さない。

「203道路での敗北」

目を合わせれば死ぬ。十歳の誕生日から二時間ボクは命の危険に苛まれていた。前に二後ろに一。全員の死角に立っているが、右前の奴が回転している。ただ動けば即時反転で背後の奴にやられる。ならここは草むらだッ！

「必殺技担当ではある」

「お主は右足だ」他の皆が狂喜乱舞するなか俺は絶望していた。博士は続ける。操縦方法や武装、訓練の予定、ロボのデザインを語る寸前で博士は俺の様子に気づく。「どうかしたのか」「だって…俺はレッドですよ…？」